

三月の第四日曜

宮本百合子

青空文庫

一

コト。コト。遠慮がちな物音なのに、それがいやに自分にも耳立って聞えるような明け方の電燈の下で羽織の紐を結んでしまうと、サイは立鏡を片よせて、中腰のままそのつもりでうべ買つて来ておいたジャムパンの袋をあけた。

寝が足りないのとはなし気がせき立っているのとで、乾いたパンは口のなかの水気を吸いとるばかりでなかなか喉を通りにくい。一つをやつと食べたきりで袋を握つて隅っこへ押しつけ、ハンドバッグとショールとをかかえて台処へ出た。

水口がもうあいている。ポンプと同じさしかけのところで燃えついたばかりの竈が薪のはぜる音をさせている。その煙に交ってふき出す焰の色が、あたりにまだのこっている眠りの深さを感じさせる。サイが新聞包からよそゆき下駄を出していると、遠くの闇を衝き破るような勢で始発間もない省線が通る音が風にのって来た。

外へ出てみると風は思ったよりきつくて、タバコの赤い吊看板が軋^{きし}んだり、メリケン袋をはいでこしらえた幕をまだしめている駄菓子屋のガラスが鳴ったりしている。

上野駅へついたのは五時二十分前ほどであつた。ガランと広い出口のところに宿屋の半被^{はっぴ}を着た男が二人、面白くもない顔つき

でタバコをふかしながら、貧乏ゆすりしているばかりで、人影もろくにない。中央の大時計に合わせて紅いエナメル皮で手頸につけた時計を巻いてから、サイはまた不安な気持になってハンドバッグをあけた。折り目の擦れたハガキには、五時ごろ上野駅へ着くそうです、と鉛筆で書かれている。五時ごろ着く汽車と云えば、ゆうべわざわざ王子の駅まで行つて調べたときも、四時五十八分というのしかないのであつた。

吹きとおす風をホームの柱によつてふせぐようにして佇たたずんでみると、やがて貨物運搬の車が入つて来てサイの立っている少し手前で止つた。駅員も出て来た。どの顔を見ても、夜でもないしさりとして朝になりきっているのでもない不愛想な表情で、四辺のそ

んな雰囲気からもサイの頼りない心持は募ってゆくようである。

地響を立てて青森発の長い列車が構内に入つて来た。サイは体に力を入れるようにして機関車の煽りをやりすごすと、三等の窓一つ一つに氣をつけて後尾へ向けて小走りに歩きはじめた。忽ち列車から溢れ出る人波に視野を遮られた。リングの籠だのトランクだのにつき当りながら一番尻尾の車の近くまで強引に行つて見たが、それらしい姿は群集の中になかった。サイはホームの出口に近いところまで駆け戻つた。そしてなおよく見張つたが、初め黒いかたまりとなつて流れて来た旅客の群は次第に疎^{まばら}になつて、手拭をコートの衿にかけた丸髷の女連れ二人が大きい信玄袋を持ち合つて歩きにくそうに行つてしまうと、それが最後で、ホーム

に残っているのは貨車のまわりの貨物係りだけになってしまった。
夜どおし駛^{はし}つて来て停った機関車の下から白い蒸汽がシューシ
ュー迸^{ほとばし}つては、ふきつける風に散らされている。それを伏目で見
て唇を軽く噛んでいるサイは、涙組んだ。この次だとすると五時
三十四分のかしら。それでも来るのだろうか。もしや自分が日
を間違えたかとハツとして、もう一遍ハガキを見た。どう見ても
そこには、やっぱり三月二十五日とある。

サイはそのまま待つ気で暫く柱によりかかったが、何だか気が
落付かなくて、厚司前垂れをしている貨物係の方へ近づいて行っ
た。

「あの、五時三十四分につく上りもここに待っていていいんでし

ようか」

「え？」

「そりや常磐線だ」

別の男が軍手の片手で、

「あっちのホームだ、あっち」

「ここを一旦出てね、右の方へあがるんですよ」

「あら！ すみません」

周章あわてて顔を赧くしながらサイは、改札にことわって教えられた段々を駈けあがった。どんなわかり難いところかと思つたが、段々をあがったらもうそこが常磐線の天井の低い待合室で、奥のベンチには将校マントの軍人だの、黒レースのショールをした女

だのかなりの人が溜っている。同じホームの片側から千葉の方へゆく電車が出るので混雑がひどい。

こっちのホームは高みで一層吹きっさらしだが、いつの間にか大分白んで来て、いかにも風のある朝らしい橙色の東空に鼠色雲が叢^{むら}だっている空の見晴しや、山の手電車がしつきりなく来てそこから吞吐される無数の男女が、まだ光りの足りない払曉の空気のなかで艶のない顔色を忙しそうに靴や下駄で歩いている姿をこっちで見ているのも珍しかった。ふだんなら自分も今あっちのホームをゆく娘のように小さい風呂敷包みを胸の前にかかえて王子の通りを歩いている時刻なのである。今朝の特別さがまざまざとしてサイが思わずシヨールをひろげ直したとき、頭の上でラウド

・スピイカアが急に鳴り出した。

「三等車はホーム中央事務室より後の方でございます」

サイばかりではなく、黒いレース・ショールの女も大きい折鞆を下げた国防色の服の男、巻ゲートルの男、一団が前後してラウド・スピイカアが同じ文句をくりかえしている下をぞろぞろとそつちへ行つた。

速力をおとしてホームに迂りこんで来た列車の、ずっと後方の一つの窓から、日の丸の紙旗の出ているのが見えた。おや、とサイが目を瞠^{みは}るのと、

「あれです、あれです、日の丸を出すツて云つてよこしているから」

とせわしない男の大声がするのと同時であつた。そう云つたのは巻ゲートルの男で、どこからか自分も日の丸の紙旗を出して、頭の上に高く振りかざしながら体の幅で人ごみをかきわけかきわけ進んでゆく。サイは胸が一杯で、頬つぺたのあたりを鳥肌たてながら、おくれないうちにその男のうしろにつづいた。

巻ゲートルの男が、合図の日の丸と帽子とをいつそくにつかんで朴訥そうな若い教員に挨拶しているわきをぬけて、サイはそこに二列に整列している三十人ほどの少年たちの一つ一つの顔をのぞいて行つた。

「勇ちゃん」

皆と同じように小倉服に下駄穿きで足許のホームに小型の古い

支那鞆をおいて立っている勇吉は、サイの声がきこえないのかぼんやりした視線を周囲の雑踏に向けたままでいる。サイは思わず故郷の訛をすっかり出して、

「コレ、勇ちゃんテバ！」

と弟の肩をゆすぶった。

「なーにぼけんとしてんのヨ」

目へ涙をうかべながら笑って自分をゆすぶっている桃色のレースの派手なショールをした若い女が姉のサイだとやつと判ると、
勇吉は、

「おら誰かと思つた」

笑いもしないでそう云つて、すこし顔を赧くした。三年会わな

い東京ぐらしのうちにサイは二十になり、こうして勇吉は小学校を卒業して来た。いろんな氣持を云いあらわしようもなくて、サイは、

「荷物こんだけ？」

ときいた。

「うん」

「田岡のばっばちゃん丈夫か？」

「ああ」

「村からほかに誰と誰が来たの」

勇吉は自分の隣りに並んで立っている少年の方を顎で示した。

「まだ高等からも二人ばっか来ている」

そこへ、引率の教員が列の中ごろまで出て来て、

「では、これから二重橋へ行きますから。皆電車ののり降り、交通によく注意して下さい」

と大きい声で注意を与えた。

巻ゲートルの男が教員と並んで先頭に歩き出した。バスケット。風呂敷の包。トランク。勇吉のような時代ものの鞆。子供たちの荷物はそれぞれの形と色とで、田舎の暮しぶりを物語っているように、サイには懐しい心持が湧いた。男の子たちは黙ってそれらの荷物をもって動き出した。後から跟ついて歩く人々のなかにサイもまじった。

東京駅の前から、二重橋前の広場へさしかかった頃には、朝日

が晴れやかにまだ活動の始らないビルディングの面を照し出したが風の勢はちつともおちず、サイの長い袂は羽織から長襦袢まで別々に吹きちらされた。一行は風にさからってうつむきながら砂利を踏んで行つた。

仕切りの手前のところまで行つて横列に止つた。

「さて皆さん、これから謹んで遙拝し、銃後を守る産業戦士の誓を捧げて解散したいと思います、その前に今日から皆さんの先生ともなり親ともなつて将来の御指導をして下さる方々に紹介したいと思います」

幾力村かの小学校からとり集めて上京する子供たちを引率して来たその教員は、そう云いながらポケットから手帳をとり出した。

「名を呼ばれた人は三步前へ出て下さい」

やまかげ
山陰の佐藤清君、市原正君。自分の村の名と自分の名と呼

ばれた少年たちは云われたとおり列をはなれて前へ出た。すると
教員はちよつと体をひらくようにして、城東区境町昭和伸銅会社
浅井定次さんと、横の方にかたまっている大人たちの群に向つて
呼んだ。なかから、鼠色の服をつけた五十がらみの男が帽子を脱
いで一二歩前へ進んだ。礼！ 二人の少年の礼に、

「やあ」

というような挨拶をしながら瞬間にこやかな顔になつて自分も礼
をかえし、後しさに人々の群へ戻つた。名を呼ばれる少年たち
はどの子も口元をひきしめ、瞬きもしない眼差しを凝らして、あ

つちの方から出る人を注目しているのであった。小倉服の肩に朝日の光を浴び、生れて初めてひろい東京の風に吹きさらされながら、一生懸命な顔をしている弟たちを見ているうちに、サイは唇が震えるようになって来て、目立たないようにショールをもって行つた。これから自分の主人になるのはどんな人だろう、優しい人だろうか。こわい人ではないだろうか。遠縁にあたる王子の小父につれられて初めてお針屋へ行つた途中の気持もおぼえがある。

実際、名をよばれて出て来る男のなかにはあつさりおとなしそうな様子の人もあり、余り親切そうにも見えないのもある。紹介のすんだ組は離れたところからそれ迄とは違う関心を互に通わせて、少年の方は、その一つの顔を見はぐるまいと気を張っている

ようだし、大人の方はもっと複雑に少年をねぶみしているように見える。勇吉の行くヤマダ合資会社という羅紗問屋はどれだろう。サイは帯揚げの結びめでもゆるめたいような苦しい気になった。

城山しろやまの別府勇吉君！ 勇吉が体操のときのように脚をひろげ

て一歩二歩三歩と前へ出た。日本橋区芳町二丁目ヤマダ合資会社藤井謹之助さん。小紋の粋な羽織に、黒レースのショールを軽く手にかけて女がその声に応じて歩み出したのを見て、サイは何故となく伏目になった。上野の駅からこの三十四五の痩せぎすな女の瘡かんしょう性らしい横顔がサイにいい印象を与えていなかったのであつた。

その女のひとは、教員のそばへよって小腰をかがめながら何か

二言三言云った。

「は、いや、御苦勞様でありました」

改めて勇吉の方へ向き直って、

「けさは会社の支配人さんがお出でになる筈でしたが御病氣だそうで、奥さんが代りにおいで下すったそうです」

勇吉はきちんと礼をして列に戻って行つた。雇主にあたる人々と出迎に來た少年の身内のものも形式ばつて引合わされたが、サイをまぜてそれはほんの五六人であつた。

それから教員は短い訓示を与えた。東京の悪い誘惑にまけないで立派な産業戦士になるように。

「困難な場合がおこつても、諸君が今朝東京の土を踏みしめたこ

の第一歩の心持を忘れずに、どうか勇気を奮いおこして下さい。

万歳を三唱いたします」

雇主側の人々が前列に、うしろに少年達が並んで、万歳、万歳、万歳と三度叫んだ。朝の陽かげは益々砂利の広場を広々と照し出して、一行の姿も小さく見え、叫ぶ声も風の中へとんだ。

界限はずっと軒なみ問屋で、サイと勇吉がよりかかっているガラス窓越しに、隣りの裏手の物干が目先の先に見えた。そこで女が洗濯物をひろげている。一方に板戸棚のついた十二畳のその部屋に店の若い者みんなが寝起きしているらしく、往来に向った窓際にもこっちの窓の下にも小さい机が三つ四つ置いてある。後はが

らんとして、ガラス越しの日光が琉球表の上に斜めにさしこみ、何処やらに男くささが漂っている。吻^ほつとしたような安心しきれないような眼つきでサイは机のあたりや戸棚のあたりを眺めた。兵隊に出る年までには商業も出してやるという話で、勇吉は来ているのであった。

朝飯が出来たら呼ぶからと云つて迎えに来た女が降りて行つてしまうと、忙しいような静かなような四辺に折々電話のベルがきこえて来る。暫くしてサイが、がらんとしたその部屋のひろさに押されたような小声で話し始めた。

「姉ちゃん、けさ大まごつきした。なんで時間はつきり知らさなかつたのよ」

「おらもはつきり分んねかつたんだもの」

「——うち変りなしか？」

「うん。母ちゃんが、姉ちゃんに負けん気だして、辛^{こわ}えの無理し
んなって、よ。歸^{けえ}りたかつたらいつでもけえって来^きって」

サイは、

「母ちゃん、そんなこと云つてた？」

と何気なく笑つたけれども、その言^{ことづて}伝は心にしみた。お針屋に

とつき

十月いて肋膜になつたときもサイは歸らず、この二月には、夜業

をつづけて二十円も国へ送つた。勇吉は親身な情愛と珍しさのこ
もつた少年ぽい眼差しで初めておちおちと姉を見ながら、

「母ちゃん、姉ちゃんに会つたらよく云えつたよ」

「大丈夫さ。この頃は、サイさんよく続くって伍長さんが褒めるぐらいなんだもの」

田舎へかえりたくないサイの気持は、この仲よしの弟にもうま
くは話せそうもない。あの村。その村のなかの家。そこでの鶏の
鳴く刻限までおよそきまつている毎日の生活。思い出すと何とも
云えず懐しいところもあるが、あのなかに織りこまれてまた暮す
ことを考えると、体も心も二の足ふんで、こつちにいたいと思え
て来る。王子で二月ふたつき近く臥て、その間にサイは何度か泣いたが、
到頭いてしまった。未来の生活というぼんやりした輪も、今では
この生活とつづいたところで考えられるような塩梅である。

壁ぎわで荷をあけはじめた勇吉の日にやけた赤い頬つぺたや、

胡坐あぐらのかき工合は、まだその膝の辺に藁でも散つていそうに田舎の気分をもっているが、この勇吉にしろ、やがてはその気持もわかるここの暮しの繋りのなかに、自分ではそうとも知らずに踏みこんで来た。七つという年のちがいはかりでない心持で自分の様子が凝つと姉に見られていると気付かない勇吉は、支那鞆の中から一つ一つ新聞包みを出して畳へおきながら、

「山北んげの正ちゃんがこしらえがすんでから急にけえ帰つて来た」と云つた。

「ふーん。じゃみんな大喜びだろう」

「またいぐんだって。冬のうちばつか内地の米くいさ帰つて来たつてみんな云つてら」

「ふーん」

勇吉が姉の膝の前へ並べた新聞包は故郷の味噌づけ、蓬餅よもぎもち、

香煎、かき餅などであつた。

「王子とここさわるんだって」

「あつちはほんのしるしでいいよ。姉ちゃんき気いつけていつもい
ろんなもんやっているんだもの。——この蓬、餡はいつてか？」

「いたむから入れねってさ」

田舎でも砂糖は足りないだろう。サイが、あとでわければいい、
とガサゴソ新聞包を片よせているところへ、梯子段の下から、

「御飯ですよ」

という声がした。自分たちに云われたのかどうか分らなくて、姉

弟がちよつと顔を見合わせてためらっていると、迎えに来た女の
声で、

「さ、二人ともおりて下さい」

サイがいそいで「はい」と都会の声で返辞した。

「さ、行こう」

サイが先へ立つて梯子を下り、ここですよ、と内から云われた
襖を膝ついてあけると、そこは日のささない六畳で、大きい台が
真中に据えてあった。女中が遠慮のない視線でサイの人絹づくめ
の体を見下しながら、台処から汁椀を運んで来た。

ここで自分まで朝飯をよばれようとはサイは思いもかけないこ
とであった。

「気がつまるといけないから、お源さん、お櫃ひつは姉さんにたのみましようよ」

腹がすいている筈なのに、勇吉は三膳しか代えなかった。もつとおあがりよ、と云いたいのをこらえて、サイは洗いものを自分で台処へ運んだ。

やがて紺色の羽二重を頸にまきつけた、でっぷりした男が懷手でその部屋へ入って来た。

「よう、来たね」

主人だろうと思つて、サイと勇吉は丁寧にお辞儀をした。

「東京はどうだね、まあ辛棒が大切だ。追々勝手が分りやあ何にも心配するがもなあないさ」

煙草を一服、二服して、

「何てつたつけ、勇——吉君か、丈夫らしいじゃないか」

サイは自分の膝の上を見ている。ちゃんと対手を真面目に見ている勇吉は返辞するのによく声が出ないというような困った表情をした。

「ハハハハ、まあいいさ。あとで旦那さんが見えるから、御挨拶しな」

じゃあ、これは支配人というんだったのかと、下を向いたままサイは何だかおかしさと馬鹿らしさがこみあげた。何て主人のような物を云うんだろう。

「ねえちゃんのいるのはどこだい？」

姉ちゃんというより姐ちゃんという風にきこえる問いをひきうけて、

「どっか王子の方ですってさ」

わきからおかみさんがバットに火をつけながら答えた。

「工場なんですって」

「こつからは——大分あるな。近すぎるよりは身のためだ。家へもよく云ってやって下さい。たしかに引受けたからってね」

「どうぞよろしくお願いします」

サイは頭を下げた。

「じゃ、装^{なり}みてやって」

「そりやあなた、新どんに云ってくれなけりや」

「あ、そうか」

片方は懷手のまま立ち上りながら、

「今仕着せを出してやるから、着たら店へ来な」

「さ、私もこうしちやいられない」

従つてサイも勇吉も坐つていられなくなつて廊下へ出た。

二階へ戻ると、サイは寂しい眼色をしながら黙つて新聞包の土産をわけはじめた。

声を出したら涙が出そうで、弟の顔を見ず格子をしめ、さて問屋町の往来へ出て、サイの気持は全くとりつくはがなくなつた。まだやつと九時すこしまわつたばかりだった。日の暮れるまで

にはうんと時間がある。きのう、是非にと今日休ませて貰うように頼んだとき、伍長は、サイさんがそんなに迄云うんならよくよくのことだろう、よし。と許してくれた。そのときは勇吉を出迎えるというだけで心がいっぱい、こんなにあっけなく別れたあと、あまつた一日のつかいみちに困ろうなどとは念頭に浮んで来なかった。

いかにも王子の家へこのまま帰る気はしない。何処か行くところはなにかしら。風で揺れているような春の陽を真正面にうけながら、ともかく停留場へ向って歩いているサイの頭に浮ぶのは、せむしのごく意地わるなお針屋だの、三カ月ほど女中に行っていた勤人の家、さもなければ、同じ村から来ているフサイのところ

ぐらいのものだった。フサイのいるのは目黒だし、女中をしているのであつたから急に行つたところで、立ち話が関の山である。自分ひとりが休んで出て来ているのだから今の勤めの友達のところへ行つたつていないことは知れている。どこか行くところはな
いかしら。サイにすれば、王子のうちの婆さんではない誰かの前で抱えている新聞包をあけて、堅くなつた蓬餅でも焙^{あぶ}りながら、三年会わなかつた弟の勇吉が駅で自分を見それて、吃^{びっくり}驚したように誰かと思つたと云つた話もしたのであつた。故郷というものがひどく近くてまた遠く思える心持もきようの気持も何だか誰かに話したい。そんなことも話せるようなところはどこだろう。

停留場の赤い柱の下で桜模様の羽織の袂や裾を風に煽られなが

ら、サイはぼんやり電車を一台やりすごした。

二

いく種類もの作業場が棟々に分れていて、石炭殻をしいた道がポプラの並木のある正門からそれぞれの方角に通じている。

門のところに立っている守衛が、朝入って来る娘の挨拶のしやうが悪いと、生意気なと一度でも二度でも礼をやり直させる。そこはそういう気風を寧ろ誇っていた。そして、四月に入ると、女たちが羽織を着て来ることを許さなかった。帯つきに、定められている作業服を着て門を潜らなければならぬことになっている。

広い敷地の、その辺は元何だったのか三四尺ばかり小高く土の盛り上った所があつて、青々した雑草まじりにタンポポが咲いたりしている。そこへ腰をおろして、何ということなし伸して揃えた足袋の爪先が春日に白く光るのを眺めている娘。作業室の羽目にあつち向きに並んで、背中を照らされながら喋っている娘たち。ここは本を持ち込むことはやかましく禁じられていた。だから昼の休みも毎日こんな風にして過ごされる。

胸に番号のついた作業服を着たサイと弓子とは、石炭殻の道を購買の方へ歩いていった。事務室の裏手つづきで、どの作業場からも真直来られる車軸のようなところに、小さい市場ぐらいな購買がある。ボルトで締めた高い天井の梁や明り通りのガラスの埃が

この頃の陽気で目立つ。相当こんでいる三和土たつきの通路を二人は菓子部へ行つた。ここの蕎麦そばボーロが王子の婆さんの好物で、サイは時々買つてかえつてやっている。

呉服部のところで、ケースの上にくりひろげてある絹セルや夏物柄の銘仙をちよつとさわつて見たりしながら、

「これ、本当に銘仙なんかしら」

弓子が心元なそうに呟いた。

「私たち、折角働いてこしらえたつて、この頃のものなんか何こさえているんだか分ないみたいで詰んないわ、ねえ」

月賦がきくのと時間がないのとで、娘たちはつい購買で拵えることになるのであつた。

「サイちゃん、もうすんだの？」

「ううん、まだ一月あるの」

ぶらぶら行くと、弓子がサイの作業服の筒袖のたるみをきゅつとひっぱった。

「どうしたの」

眼顔で弓子がさすのを見ると洋品のところでひとかたまりの娘が、この頃流行の髪につける小さい結びリボンを選んでいる。その真中で、綾子が水色つぽい一つを手にとって、

「どれ？ いいけど、地味だねえ」

わきに立っている娘の髪の上にもって行つて眺めているのであった。中高なのと頬の上のところに黒子が一つあるのとで綾子の

派手な顔立ちは人目に立ったし、そんなにしてリボンを選んだりしている動作のうちにも、いつも見られる自分を意識しているポーズがあるのであった。

「こないだ三越でとっても素敵なの見たわ。繻子でね、片方は鼠っぽい銀色、裏は薄桃色で、モダンだったわ、一尺六十八銭よ」
行きすぎて暫くすると弓子が腹立しように、

「ふん」

と云った。

「見なさい。ピクニックの話がちよつと出たらもうあれだ」

綾子さん、華宵の女のようにだわ、ととりまく娘もあつて、サイはそうなのかしらと距離のある心持でいたが、弓子の綾子ぎらい

は容赦なかった。向いあつて喧嘩するというのはなく、製図板を並べながら互に決して口をきき合わないという形で継続されているのであつた。

「けさだつてさ、体操のとき、わざわざ直させたりしてさ、何ていけすかないんだろ」

「そうだったかしら」

「どこに眼がついてんのよう」

ふつと笑えて来たら、おかしさがとまらなくなつて、サイは、ああいやだ、いやだ、と手の甲で涙をふきながら肌理きめのこまかい顔を赤くして笑いこけた。

「何なのさ、何がそんなにおかしいのよ」

「だアって」

「氣持がわるいわよ、云つてよ」

「御免ね、何だか急におかしくつて」

いつか、綾子が鉛筆を床へ落したことがあつた。それがころがつて隣の弓子の足許へ行つた。弓子は勿論ひろつてやらない。そこへ伍長の飛田がまわつて来て、

「鉛筆がおちてるぞ」

と云つた。弓子も綾子もだまりこくつて製図板にふさつていると、飛田が、ポマードできつちりとわけている頭をかがめて、それをひろつた。

「支給品を粗末に扱っちゃいけない、物資愛護、物資愛護」

そう云いながら鉛筆をあげて、そのあたりを見まわしたとき、今まで知らんふりだった綾子が、

「アラ！」

ルビーの指環をはめた左手をすこし反すようにして出して、

「すみません」

その鉛筆をうけとった。

弓子が人をばかにしていると後でぷりぷりおこった。サイが困ったようにうけ答えしていたら、わきで爪をこすっていたとよ子
が、

「ふふふ、サイちゃんばかりいい迷惑だわね。何故あんなに云うか知ってる？」

サイの方は見ないでなお作業服の袖で爪をこすりながら氣をひくようにきいた。

「さあ」

「弓子さん、自分だって伍長がすきなよ。だからよ、ね、わかつたでしょう」

それを思い出して笑えたのだったが、笑いやんでみると、サイには、あんな風に自分を見ないで云つたとよ子の云いかたにも何か特別なものがこもっていたようで、妙な氣がした。

サイたちの室は娘ばかり二十人足らずで、男の働いている大きい作業室から張り出しのように新造された一区画であつた。みんな二カ月の見習もここでやった新しい臨時の連中ばかりである。

三時頃、大きい方の部屋で飛田の何か怒っている声がした。云いわけらしい別の低い声がしたと思うといきなり平手うちが聞えた。

「飛田の手だと思ふなッ」

ふくら脛が重たくなつて、両肱をもたせた製図板に重心をかけて小休みしていたサイは、びくつとした顔になつて、烏口を持ち直した。ほどなく飛田が腕章のついた作業服に、幾分顎の張った苦い顔でこつちへ廻つて来たときには、娘たちは皆緊張して、いろいろな髪形を見せながら、ひっそりと図板についているのであった。

定時のサイレンが空気を広くふるわして鳴りわたった。初まりは低く次第に太く高まって暫くの間大空に音の柱が突立ったようにそのまま鳴ってから、低くなつて消えるサイレンの響は、いつきいてもサイに漠然とした怖^{こわ}さを感じさせる。あっちこちでサイレンが鳴っているけれど、このだけはその幾通りかの音色をぬーと凌いで、息も長く、天へ大入道が立つようだった。このサイレンが鳴り出すとその音の太さ高さから附近一帯の家並の小ささが今更感じられる。

残業の日で、一しきりサイレンにふるわされた空気も鎮り、夕方の方のすきとおつたような西日が窓から見える雑草の色を目にしますと、サイは冬の間には知らなかった気持が胸から脚へと流れる

のを感じた。淡い気怠るさのような、また哀愁のようなその気持は、空気の柔かなこの頃の夕方のひととき、サイのぽってりした一重瞼を一層重げにするのであった。

窓際に小さい円い腰かけをもち出して、膝の上に弁当の包をのせたまま、そんな気分でいるサイのわきへ、てる子が、

「一緒にたべましょうね」

とよつて来た。年の少いてる子は、快活で、弁当箱のふたについた御飯粒を箸の先で拾いながら、

「あらいやだ、母ちゃんがまたこれ入れている、私末広きらいなの……千葉の親類がこんなものをくれるんだもん」

そう云いながらサイの弁当をのぞいた。

「ちよつとおかずとりかえない？」

切干の煮つけをサイは昼もたべた。きのう弁当に入っていたのも同じものだ。王子の婆さんは元からそういうことを平気で下宿人の誰にでもした。この頃は、ものがあがつたというわけでおひどい。男連は、だからじき弁当を持って行かないようになってしまふのであつた。

「ね、あんたどう思う？　伍長さん、ほんとにピクニックへつれてつてくれると思う？」

「さあ……どうなんだろう」

と云いつつ、サイの目はてる子が弁当の下にひろげている古新聞の写真にひかれた。

「ちよつと」

「なに？」

「その写真」

サイが箸を持ったままの手でこちらへ向け直して見ると、それはやっぱりそうだった。勇吉を迎えに行つたあの朝、やはり上野へ着いた山形県からの小学卒業生たちが一団で撮られていて、東北も雪の深い奥から来た少年たちは紺の筒つぽを着て、大きい行李を持っている。偶然こつちへ顔を向けている少年の円っこく光つたようにとれている鼻や、おどろいたような真黒な二つの眼は、その足許におかれた新しい行李とあわせてサイの心に迫つて来るものがあつた。可憐なる産業戦士、晴れの入京という見出しがっ

いている。あの三月の第四日曜にはその前の日に卒業式をすましたような少年たちが、万を越す数で地方からこの東京へ教員に引率されて来たのだ。

よくニュース映画に思いがけなく出征している息子や兄の顔が映っていて、大よろこびした話を、サイは思い出した。この子の親がもしこの新聞を田舎で見たら、どんな気がしただろう。

「ああ、ほんとに写真とろう」

サイは思わず溜息をつくように云った。

「弟がこんど日本橋の方へ来たのよ」

ここで育って、ここで勤めているてる子にその気持は通ぜず、悪気もないとおりの一遍の表情で、

「いいわね、淋しくなくって」

あとは「愛染かつら」の主題歌を鼻でうたいながら、円椅子を片づけはじめた。

三週間近くなるのに勇吉はまだ手紙をよこさない。ここでは、なかの仕事のことをひとに話すことを堅くとめられていて、親兄弟でも同じことと云いわたされている。自分の方から弟との間におかなければならない距てがあるようで、サイは何のための何なのかも一向知らず、ただ薄い白い紙の上に朝から晩まで引いている墨汁の線へ、訴えのこもった娘らしい視線を落した。

夜勤で、かえったのは朝七時半ごろだったが、夕方四時には、また出かける仕度をしなければならぬ。五時から夜中の十二時迄で、次の日は定時で一日という順になっている。

ピクニックのあとから急に夜勤がはじまったりしてまた忙しくなつて来た。荒川堤へ行つたのはよかったが、昼から雨になつて、みんな裾をはしよつて、手拭を帯の上へかけて^{あわただ}遑しく歸つた。

キコ・キコ・キコ・キコとポンプから洗濯盥へ水を汲みこみながら、サイはその日の情景を断片的に思い出した。その町筋には、鑄物工場がどつきりあつて、洞のように暗い仕事場の奥で唸りながら火焰があがつていた。古腹がけのどんぶりのところだけ切つ

たのを前に下げて、道端の炭殻の中を箸でせせっていた神さんたちの姿。黒くつて、震動しているようなその町の中を出はずれたら堤はぽーっとなるほど遙々とのびていた。川は本当に気持がよかった。

「川口へ来て世帯を持ちな、暮しいいぜ」

まだ独身で、ここから通っている飛田がそんなことを云った。

誰かが路の両側を見まわしながら、

「だってえ。どっち向いたって真黒けな人ばかりみたいなんだもの」

「それがいいのさ。金^{かな}気がしみついてるから虫がつかないよ」

綾子が細かいめの紫と白の矢羽根の袷で、パラソルを膝の前へ

つきながら河原で跼んで流れを見ていた姿が、シャボン泡の中へ甦った。

あらかた洗濯物がすみかかったとき、婆さんがひよいと裏へ首を出した。

「おや、洗濯か。サイちゃんはまめで、見てても気持ちいいや。

——若いもんはいいねえ」

薄赤い、むっちりした手が水の滴をたらしながら襦袢をしぼり上げるところを見ていたが、引込んだと思うと、

「ちよいと、すまないけど、これもついでにザブザブとやっといて下さいな」

焼杉の水穿きをつっかけて、自分の水色格子の、割烹着をもつ

て来た。

「ここへおきますからね、すまないねえ」

サイがどうとも云わないうちに、素早く、シャボン水の流れて
いる三和土へじかにおいて縁側の方へ行つてしまった。

しんから舌うちしたいところをやつと耐えて、サイは唇をかん
だ。何て気にくわないやり方をする婆さんだろう。まともに物を
頼むということを知らないで。姉さんと呼んでいるこのかみさ
んのトミヨがサイの母親の血つづきで、上京したのも、その連れ
合いが高島屋の裁縫をひとてでやっているというお針屋の口を世
話してくれたからであつた。ところが家のなかのことや、サイの
ほかに四人おいている下宿人の世話は連れ合いのおふくろである

この婆さんが一切とりしきっていた。トミヨは子供にかまけて、合間に賃仕事をするのが精一杯のように、まとまっては物も言わなかった。

サイを今の勤めにふりむけて、女中に行っている先から暇をとらしたのは、周旋屋のようなことを商売しているトミヨの連れ合いの寸法であつた。

「そりやお目出たい。全く今どき、いいねえちゃんが、よその台所を這いずっているなんて気が利かないよ」

婆さんは、一応戻つて来ながらも不安そうにしているサイにそう云つた。

「そうときまれば、サイちゃんも立派なおつとめ人だもの、あん

きに手足を伸すところもいるわけだね」

耳のうしろから半分吸った煙草を出して、何か思案しながら豆タンの火をつけている秀太郎に、

「あの二畳あけたらいいだろう」

と云った。

「あすこなら、家のものの目も届いてサイちゃんも安心だし、十五円で三度たべて一部屋ついて、大勉強だよ、ねえ」

「うむ。——それにしても、何とかしてもう三四人、東京で働きたいって娘はないもんかね。どうだ、サイちゃん、田舎の友達でそんなのないか」

そんなことで月十五円払う話もついたことになってしまった。

サイは、婆さんに押しつけられた洗いものまで竿にとおしてしまうと、徹夜して来た眼玉の芯^{しん}がズキズキ疼くような疲労を覚えた。

茶の間から掃き出したごみが葉蘭にくつついている手洗鉢の横からあがつて、サイは自分の部屋の戸をあけた。便所と手洗いの間にはさまれているこの二畳はおかしな部屋で、どだい壁も天井板もないところであつた。低い頭の上から、三方ぐるりと白地に紋がらの浮いた紙貼りで出来た部屋であつた。おそらく素人細工のその紙貼りは、柔かくぶくついている上に天井にも横の方にも汚点が滲んでいて、初めてそこに坐ったとき、サイは鼠の小便のかかったボール箱に入つたような気がした。そして、この頃の陽

気になると、その部屋はほんとにボール箱みたいな糊の匂いがする
のであつた。

片隅に積んである蒲団を斜^{はす}かに敷いて、サイは横になった。

とろりとしたと思うと、部屋のすぐ外の狭苦しい空地へ、ワ
ツと関^{とぎ}の声をあげて、うちの子供が近所の仲間と走りこんで来た。

突カン！ 突カン！ 何だい！ 支那兵の癖して。負けなけりや
遊んでやんないから。ワーツ。竹の棒でうち合う音がする。遠く
なったり、近くなったりする夢と現の境でその声をきいていると、
どの子か、駈けまわっている拍子にいやというほど二畳の窓へこ
けかかつて、格子なしのガラスがこわれそうな音を立てた。

サイは、夢中でその騒ぎから身を庇うように蒲団を頭まで引か

ぶった。

「どこの子だい！ 乱暴するんなら、表の空地でやつとくれ」

婆さんが、便所の中から怒鳴りつけている。びっくりしたので動悸がうって、サイは蒲団から苦しそうに上^の気^ほせた顔を出した。すっかり眼がさめてしまった。眼がさめながらまだ痺れたように睡たくて、背なかが蒲団から持ち上げられないほど懈^{たる}い。こういうときがサイにいちばん辛く悲しかった。働くことはかまわないのだけれど、せめて夜勤のあとぐらいたっぷり食べて、存分寝てみたい。その気持が自分でも名状出来ない思いとなつて、若い体に脈うって涙がこぼれた。

冬のころ、このことからサイは今の勤めをやめようかと思つた

ことがあつた。先にいた勤人の家庭では食物と睡る時間はたつぷりあつた。給金が十五円になれば、その方がいいぐらいであつた。丁度忙しくなりかかった時で、サイがそれやこれやで余り浮かない顔をしていたら、飛田が目敏く、見とがめて、

「サイさん、どうした、この頃元気がないようだぜ」

もしいやなら、このなかでほかの仕事にまわしてやつてもいいと云つた。サイは顔を赧らめた。

「私この仕事がいやなんじゃないんです」

ここをやめても、すぐによそへ勤めることは許されないという条件もあるのであつた。

涙をこぼしたら、いくらか気分がすつとした。手紙の様子では

勇吉もだんだん馴れて来ているらしい。でも、たった一カ月足らずのうちにゴム裏草履が三足にシヤボンを二つもとられたとはどういうんだらう。田舎者だから^{からか}揶揄われているのかしら。当惑しながら、黙っている勇吉の丸い顔がサイの目に浮ぶようである。

蒲団をあげて積んだ上へ便箋を置いて手紙をかきかけているところへ、

「是非サイちゃんにみせたいものがあるんだがね」

婆さんが重そうな風呂敷包を下げて入って来た。

「——ホーラ、どう？ 何ていい縞だらう！」

くりひろげられたのは伊那紬で、正絹まがいなしの本場ものが今回限り一反二十円なのだそうだ。

「小父さんの友達から荷が今ついたところさ。サイちゃんには特別五カ月月賦でいいにしくよ。月四円でこんな物が出来るんだからいいねえ。娘が二十にもなりや帯一本だつて大事な身上だ」

躊躇したあげく、サイは到頭半分云いまかされた形で、藍と黄のを一反とることにしてしまった。

「お金がすまないうちに着なさんなどは云わないから、安心おし」

昼飯の間じゅう、婆さんが余り物のあがつたことをくどく喋るものだから、これも夜勤あがりて寝ていたのを二階からおりて来て一つチャブ台でたべていた旋盤工の清水が、

「うー、たまんねえナ」

と急に茶づけにして、かつこんで、

「お婆さんは智慧者だよ。喉へつかえて腹が忽ちいっぱいだ」
まがい銘仙の袷の裾を脚に絡ませるようにして大股に立つて行
つてしまった。

「ふん、すこし金まわりがいいと、すぐあれだ」

婆さんは、おからの煮たのをよそいながら、

「ちつとはよそも見るがいいのさ」

と云った。

「酒屋の横の井上さんなんかじゃ、六畳一間を四人にかして十七
円ずつとつてゐるじゃないか。それだつて、今時この辺で何て云う
者はあるやしない」

そういうとき、婆さんはサイをいかにも家内のもののように自

分の側にひきつけた物云いをするのであった。サイはつかまれたその袂を振り攬るような気分で、ぽってりした一重瞼に陰をふくませ、黙りこくっていた。

四

暫く見かけなかった千人針が、駅の附近にちらほらしはじめた。サイは謂わば千人針の東京へ出て来て暮すようになったのだったが、赤い糸を縫いつける黄色い布地も、きのうあたり頼まれて手にとったのは木綿でなく、妙なレーヨンの綾織のようなものになっていた。二重の赤い糸を二重に針にからめながら、こんな布地

ではじき糸のたまだけのこるようになってしまふのじゃないかと思われた。そんなになったときの千人針を考えると滑稽のようだし可哀想でもある。それでも頼むひとの本気の顔は、やっぱり純綿のときと変らないのであった。

勤めさきの仕事に使う紙もこの頃はやかましくなつて、元のように割合簡単にすてることを許さなくなつた。隅へ番号を入れた紙を原図の上へピンでとめていると、便所からかえつて来たてる子が目を大きくしてよつて来た。

「ちよつと、赤紙よ」

息をつめた囁き声なのに、弾かれたようにまわりの顔がいくつかこちらに向いた。

「隣りの室にも来た人があるらしいわよ」

忽ち室じゆうにその気分が伝わったが、その動揺を反撥するようなもう一つの気分もあつて、みんなは格別それ以上喋りもしないで仕事をつづけた。

空をふるわせて鳴るサイレンの響の下にある町ぐるみ、ここへ通う者の一家で出来ているかと思われるような土地柄であつたから、サイが来てからばかりでも、臨時の若い男や世帯もちのおっさんなど、随分たくさん出た。その度にここでも女がふえて来た。ここの土地に住んでこそいるが、国は遠く東北や山陰の地方にあるというような娘がふえて来た。故郷では一家から二人出ているという娘もいる。この頃は、女十五人に男一人の割だとき。東

京がそうなのか、日本がならしてそうだったのか。それも、赤坊からお婆さんまでの女をひつくるめてのことなのかどうかは分らなかったが、働いている娘たちの耳の底にそんな言葉は^{よど}澱んでしみこんで、何かの感じとなっていたのであった。

赤紙のことがみんなの気をはなれて暫くしたとき、伍長の飛田が入って来た。一つ一つの図板をゆっくり見まわってから、窓を背にして立って、

「ちよつと、そのままの位置で手だけ止めて」

いつものような口調で命じた。顔がすっかり自分に向って揃うのを待って、飛田は軽い咳ばらいのようなことをすると、

「一つ報告しなければならぬことが出来ました。実は只今――」

あらつ、というような声がしたような気がして、図板のまわりを漣さざなみのような動揺が走った。それを、自分の声でおし鎮めるようにしながら飛田がつづけた。

「実は只今、光栄ある召集令をいただきました。兼々待望の好機でありますから、全力をつくして本分をつくしたいと思いますが、皆さんとは養成の時代からの浅からぬお馴染みであります。今日まで楽しく共に励んで来ましたが、これからは、飛田は前線に、皆さんは銃後に、其々本分をつくすことになった次第です。御承知のとおり、まだ数日余裕が与えられてありますから、愈々いよいよ出発の前日迄はこれまでどおり、及ばずながら御一緒に働きたいと思ひます」

飛田は、それだけ云うと軽く頭を下げる様子をして、やがて、

「作業をつづけて」

と、もう一度、自分も図板の間を歩きはじめた。

みんなうつ向いて、サイは何ということなし散っていない後れ毛をかきあげるような動作をした。烏口だの定規だのが、ばらばらにお義理のようにとりあげられた。すると、室の奥の図板のあたりで、くツ、くツと笑いをこらえているのか、泣声をこらえているのか咄嗟には分らないような女の喉声が洩れて、とよ子が臆やがて誰の目にも明らかな啜り泣きで作業服の肩をふるわしながら、顔をおさえて小走りに室から出て行った。

何とも云えないその場の空気になった。飛田は最後の図板まで

同じ歩調でまわって、一言も云わず隣りの室へ走った。

よほどたつて、とよ子が極りわるそうに、洗い直したような顔をうつむけて、そつと自分の図板へ戻つて来た。そして、まだすつかり落着けないらしくどこか気落ちのしたような風で烏口をいじりはじめた。

弓子は、ちえツというような眉のあげかたをしている。綾子が案外冷静に、頬の上の派手な黒子をこちらに見せて、唇のあたりに妙な薄笑いのような表情を泛べながら仕事しているのを見ると、サイはいやな気持になった。一つ一つの図板のまわりから見えない渦が流れ出して作業室のなかをめぐるようである。サイは、仕事に身がいれられなくなった。

飛田のあとには、どんな伍長が来るだろう。サイにしろ、烏口へ墨汁のふくませかたから教えられた飛田と離れることは、何か普通の氣持でないのであつた。

てる子が無邪氣に、

「ああ私、何だか変な氣分になっちゃつた」

定規を図板のむこうへ押しやるようにしながら、胸を反らしてその辺を見まわした。

「ねえ、何か御饞別あげなきやわるいでしょう？ みんな何あげるの？」

返事をするものがなかった。

「みんなで羽二重の千人針こさつたげましょうか」

「うるさいわよッ」

弓子が疳癪声を出した。

「あとで、みんなして相談すればいいじゃないですか」

てる子のああ私と云った声も、それを叱りつけた弓子の声も、仲間うちにきこえる程度でのひそひそ声であつた。作業時間のうちに話しすると、ひどくおこられた。

シセンを越えるという語呂の縁起から五錢玉を千人針につける人がある。その五錢玉のついた千人針をサイの室の娘たち一同で飛田に贈ることになった。ほかに五十錢ずつ集める話がきまつた。「おつかさん一人になつちやうのね、気の毒ねえ」

「——駄菓子屋の方が繁昌してるもの平気さ。そんなに心配なら、

てるちゃん、これからちよくちよくお見舞ねがいきましょう」

「なんにも、そんなに云わなくなつていいじゃあないの」

てる子が、むきになつて涙をためた。

「弓子さんたら……意地わる」

弓子もてる子も、いがみ合いながら氣持がしんからふつ切れてはいいないのである。

何か焦々した、調子の揃わない氣分が娘たちの作業室に拡つた。今まで全体が平らに湛えられた水の面のようにだった空氣が、何とも云えず絡まるものになつて、飛田が入つて来るとそれを迎えて彼の動く方へ、前へも後へもよこにもたてにも、互にぶつかりながら跟いて動くような神經が群だっているのであつた。若い飛田

は、その感じから我知らず窮屈になつて、みんなの顔を見ないようにして、図板の間を歩いて行く。それがまた室の空氣に反射する。肩のつまるような一日が過ぎると、サイは、いつもよりずっとくたびれて、不機嫌になつて家へ歸つて來た。

敷居をまたぐと、その土間で飯まごはんとしていた六つの妙子がポツンと、

「お兄ちゃんが來たヨ」
と云つた。

「お兄ちゃん？」

「うん」

「勇吉さんが、つい今しがたよつたけれど、あんたが歸つてない

もんだから、また来るって——」

いつでも来られる人みたいに云う、トミヨの気働きのない言葉がサイの瘡にふれた。

「用じやなかったんでしょうか」

盗られた三足のゴム草履のことやシャボンのことが浮んで、心配になった。

「何とか云ってかなかったでしようか」

「なんも云っていなかったよ。自転車そこにおっかけて、ちいと話したばっかしで……」

「……でもここがよくわかったこと」

「私もそう思ってたね。そしたら、何でも東京じゅうの番地の入っ

た地図売ってるんだってね、それを見て店の使いもするんだってよ」

こっちの方へついであつたのかしら。日本橋からここまでと云えば、往復で何里になるのだろう。

今時分からもっと暗くなる頃にかけて、表の十二間道路の片側は東京方面からこっちへと歸つて来る自転車で、一刻まるでトンボの大群がよせたようになる。後から後からとむらのない速力で陸続通り過ぎて行く自転車の流れを見てみると、体のなかで血がそっちへ引かれてゆくような、面白くて悲しい気分がした。たまに同じ車道のあっち側を逆に向つてゆくのがあると、それはペダルを踏んでいる脚の動きまで目に見えて重そうだ。

遠い路のどこかの辺を、勇吉も今頃そうやって帰っているのだろう。その姿を想像しようとする、サイの心には、まだ田舎にいた時分、サドルをはずして横棒の間から片脚むこうのペダルへかけ、腰をひねって乗りまわしていた弟の様子が泛んで来るのであった。

五

「お早うございます」

サイは何心なく五六人かたまっている方へよって行つた。

「おはようございます」

なかの一人がふり向いてそう云ったきり、みんなぶすつとして
いる。眼をしばたいて、サイは小声で、

「どうかしたの？」

と訊いた。

「ふーん」

「そりや誰だつて氣持がわるいわヨ、ねえ、火曜日にさ、何てみ
んなで決めたの。誰だか知らないけれど、出しぬいて自分だけ好
い子んなつて不動様のお守りもつてったり、防弾鏡もつてたり
するなんて——きらいだ」

作業室の娘たちの代表で、とも子とみのるが、昨夜川口にある
飛田の家へ千人針と餞別の金とを届けに行つた。飛田は留守で、

母親が前掛の端で涙を拭きながら礼をのべ、あなたがたのお仲間が成田山のお守りを持って来て下すつたり、何か鉄で出来た鏡をわざわざ届けて下すつたり、と有難がった。

「誰だか、名をききやよかつたのに」

「おばあさんにわかるもんですか、——間抜けくさくて、そんなことを出来やしないわよ」

皆が揃って、体操の始る前、とも子は腹のおさまらない調子で、
「千人針とお餞別、ゆうべ確に届けましたが、私たちの知りもしないお守りだの鏡だののお礼までおつかさんに云われて、挨拶にこまったわ」

と報告した。

「あら！ そんなら私だって黒猫のマスコット持ってたのに」
てる子が残念そうに云った。

「そうじゃあないのよ。みんなできめた通りにしないひとがある
っていうのよ」

飛田が一同に贈物の礼を云ったときも、室の気分はしこりがある
つて、しめつぽかった。

「ああ、愈々明日か」

図板の間をぶらぶら歩きながら、睡眠不足と酒づかれの出たよ
うな艶のない顔を平手でこすって飛田が、寧ろ早くその時になっ
た方がいいというように云った。

「みんな、後の伍長さんが来てから、嗤わらわれんようにしつかりや

つてくれ。それだけはよく頼んどくぜ。何て教育しとったと云われたんじゃ、成仏出来んよ」

窓際へ佇んで伸びをするようにしながら、

「満州事件のときにも出征したが、どうも……」

と云いかけて、後はやめた。そして暫く浮かない顔で外を見ていたが、氣をとり直したようにくりと向き直って、

「さ、みんな、朗らかに、元氣を出した、出した。明るい顔を見せるもんだ」

そう云われても、娘たちの眼の色は引立たなかった。

昼の休みに、とよ子が顔色を少し蒼ざめさせて、

「とも子さん、ちよつと」

とよつて行つた。

「あのお守りだか、鏡だかの話、私こないだ泣いたりしたから、みなさんに変に思われているかもしれないけれど、全く知らないんですから——」

切り口上で云つて、一層蒼い顔をしたままむこうへ行つてしまつた。

何も彼も、何てこんがらかつて妙なんだろう、サイは両方の顚めかみを人さし指でもんだ。

ここのしきたりで、出征の当日は門内の広場で一同送つて、外に待っている在郷軍人や国防婦人会が、往来を行列でねつて行くことになっている。

何を思ったのか飛田が、

「明日は決して誰も欠勤しないように」

と念をおした。新しい伍長が来るというのが理由であつたが、そればかりでもないものを感じられるようなこの二三日の空気なのであつた。

珍しく定時間が続いている。その日は午後になつて降り出した

驟^{しゅうう}雨が運よくひけ前にあがつた。雨に濡れた低い屋根屋根が西

日にテラテラして、どこかで雀が陽気に囀^{さえず}る声がしたりしている。

洗われた大通りはいつもより遠くまで見とおされて、銀杏の街路

樹の色が青蠟燭^{ろうそく}の列に思える。サイは瑞つぽい空気を心持よく

吸いこみながら、ゆっくり歩いて、ペーヴメントが一方はロータ

りについて右へ曲る本通り、もう一方は真直橋をわたって先へゆく角へ来かかった。

丁度その二股になった橋よりの歩道のところに茶色に塗られた大型トラックが積荷へ被布をかけてあっち向きに停っている。歩道のところに白バイが来ている。サイの歩いてゆく側の歩道のところに人がかたまっている。だんだんそばへ行つて、サイは思わずセルの袂で口元をおさえた。トラックの後の車輪の間に菰こものかぶせられたものがある。自転車が一台トラックからすこし離れたところにひっくりかえったままになっている。即死らしかった。広くてきれいな雨上りの車道を自動車やトラックがそこまで来かかると、一様に感情をあらわしてスーと速力をおとし、しかし角

で停車出来ないところだから、見かえりがちに徐行して過ぎてゆく。どこもこわれたところのないような形でひっくりかえっている一台の自転車と菰をかぶせられている者の哀れな形とは、サイに鼻の髄が痛いような心持をおこさせた。スリッパだ。両方でよけそこなつたんだ。こっち側の人だかりの間でそんな低い声がきこえる。

袂で口元をおさえたなり、サイはまた歩きだしたが、涙の出来ない哀れさが苦しく喉につまった。菰の盛り上っていた工合が大きい男と思われず、そう思うと腿のあたりを震えが走った。東京へ来たばかりのあの少年たち、まだアスファルトのスリッパを知らない少年たち。勇吉の自転車姿もそのなかから浮き立って来て、

サイは、袂のさきで切なそうに小鼻の横をふいた。

この頃の公衆電話には電話番号帳がない。それを思い出して、サイは、ずっと廻り道をして郵便局へよつた。

勇吉を呼んでくれと頼むと、電話口で、オーイ何とか怒鳴っているのがきこえる。受話器をきつちり痛いほど耳へあてがってサイは待っていた。やがて、人の出た気配で、ぼんやりした声が自信なげに、

「——ハア」

と云うのが伝つて来た。サイは爪立って送話口へのびあがつた。

「ああ、もし、もし、勇ちゃん？」

間をおいて「——ハア」

「勇ちゃん！ もっとおっきい声出さないよ。もし、もし。きこえる？ 私よ……」

サイは、そういう間も時間がきれそうで気が気でない思いをしながら、ひろい東京のあっちの果から覚束なく響いて来る弟の声を一心にたぐりよせた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第五卷」新日本出版社

1979（昭和54）年12月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

親本：「宮本百合子全集 第五卷」河出書房

1951（昭和26）年5月発行

初出：「日本評論」

1940（昭和15）年4月号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年5月4日作成

2003年7月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三月の第四日曜

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>